

(別紙2)

## 論文審査の結果の要旨

氏名 江口 大輔

本論文が対象とするのは近代ドイツ文学において独自の位置を占める作家ジャン・パウル (Jean Paul, 1763-1825) の代表作『巨人』(1800-1803) である。

おびただしい比喩と頻繁に挿入される脱線的な語りのため解体されている印象を与えるジャン・パウルの作品に、論者は<解体的原理>と<形成的原理>のせめぎ合いを見る。本論文は、『美学入門』なども視野に収めつつ、『巨人』のうちに「形成的原理に基づく構成体」を見出さんとするものである。それは「小説中の人物や出来事を、可能な限り包括的に、整合的な布置において捉えうるようなモデル」を構築することを意味する。

第一章では、主人公の侯位継承をめぐる陰謀劇をこの作品の主要な筋とみなす解釈に対して、主人公の恋愛と友情に関わる「内的な物語」の重要性が指摘され、主人公の時間意識が構造化されていく過程が再構成される。第二章は、各登場人物に体现されている思想的テーマを問題とする。主人公の内的発展を唯一の評価軸としてそれらのテーマを考察する教養小説的な読みを論者は批判する。それに対し、<心の内部/外部><現実世界の内部/外部>という対立軸を組み合わせた4象限に「恋愛と友情」に関わる4人の主要登場人物が位置づけられるという結論へ向けて緻密な読みが展開される。第三章では宮廷社会における人間の機械化と中心の喪失、等質的な時間について論じられ、第四章および最終章で、主要登場人物が帰属する「内的な圏域」と宮廷社会の統合が問題とされる。そこでは『巨人』全体を心身問題とのアナロジーにおいて捉える」という構想のもと、『カンパンの谷』(1797)における身体・心・第二世界という三項関係図式、『美学入門』(1804)における「無限性」の観念との関係における詩的天才・詩的唯物論者・詩的ニヒリストという3類型の導入により、前章までのモデルがさらに複合的かつ動的なものへ更新される。主人公の時間意識の構造化という内的な筋が、結末における侯位継承によって宮廷社会と統合される可能性が確保され、「小説の前史としての陰謀劇、小説内の内的な物語、そして小説後の侯爵アルバーノの物語は、心身の結合、つまり理想国家建設という結末を目指す一つの大きな物語を構成する」と論者は結論付ける。

論者は、先行研究を渉猟し、評価されるべき点と批判されるべき点を的確に指摘しながら、大胆かつ着実に論を進めている。たとえば「心身問題とのアナロジー」という観点はすでに一人の研究者によって提起されているものであるが、論者は多くの論点に修正を加え、新たな問題設定のもとに議論を緻密化し、結果としてまったくオリジナルとっていい結論を導き出している。

本論文は、「モデル」の構築に集中する方法論的禁欲のゆえに、時としてさらなる論の展開の可能性をみずから封じている観があり、その点は惜しまれるが、伶俐な読みに基づいて説得力ある論理を貫徹した力量は高い評価に値するものである。以上に鑑み、本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に相当するものと評価する。